

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

(ヨハネによる福音書 13 章 34 節)

「愛のバトン」

バトンをつなぎ、共にゴールを目指すリレーは観客に大きな感動を与えます。この競技で守るべきルールはいくつかあるわけですが、その中で最も重要なことは 1 本のバトンだけを受け渡していくことです。リレーの記録を伸ばすためには足の速さだけでなく、バトンの受け渡しの速さや精度を上げる必要があります。いくら足が速くても、バトンを落としたり、モタモタしてしまえばそれこそ足を引っ張ることになります。ですので、選手たちはバトンのためだけの練習もするのです。しかし、いくら練習してもうまくバトンを繋げないチームがあったとしましょう。彼らは練習を諦め、ズルをしようと考えます。それぞれが手元にバトンを隠し持ち、バトンを受け取ったように見せかけてトップスピードで走り出すことにしたのです。しかし、それが審判にばれないはずがありません。順位を上げるためにルールを破ったこのチームは失格となってしまいうでしょう。

最初の走者が持っているバトン以外のバトンを用意すること自体はできるかもしれませんが、しかし、初めから終わりまで一貫して同じバトンでなければ、何の意味もないのです。無事にゴールができません。自分のために偽物を用意しても、必ずぼろが出て、望んだ結果は得られないのです。そしてこれと同じことが「愛する」ことにも言えるのです。この世には様々な「愛」があります。ですから多くの方は自分なりに愛することができればそれでいいと考えます。相手と自分の「愛」の形が違って、不思議に思わないのです。しかし、私達が自分で用意した愛は、果たして完全なものでしょうか。相手への愛は一貫して失われないものですか？感情によって左右されることがありませんか？相手の益となっていますか？また、その愛し方を誰かからされた時、あなたは心から安心することができますでしょうか。

聖書は愛について、少なくとも二つの種類があることを告げます。人間中心の愛である「エロス」と神様の愛である「アガペー」です。エロスは感情的、また一時的な愛で、基本的には自分の益に結び付きます。ですから、今は優しく、プレゼントもたくさんくれて、愛の言葉をささやいてくれていたとしても、何かをきっかけとしてその態度が急変するかもしれません。愛されている実感を求めて、常に緊張してしまうでしょう。対してアガペーは見返りを求めません。相手の態度によって変質することはありません。そして決して失われることがないのです。ですから、この愛を受けている人はいつでも、安心することができます。愛されている自分を決して見失わずに済むのです。

イエス様は弟子たちに、そして私たちに「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と言われました。イエス様は私たちに対する愛のゆえに命すら捨ててくださったお方です。本物のアガペーがここに 있습니다。エロスによって愛する私たちが、子のアガペーによって愛することをイエス様が求めておられるのです。弱い私たちがこの愛によって誰かを、それも分け隔てなく愛することは非常に難しいです。しかし、自分がそのように愛されていることを知っているならば、少しずつでも歩み出すことができるのではないのでしょうか。イエス様と一緒に愛のバトンをつなぎましょう。



2021年9月1日
認定こども園福光青葉幼稚園
園長 横山一乃

保育理念	受ける愛 与える愛
	愛されていることを知り・愛される者となるために

「心かよわせて」

園庭を出ようとしたT君が立ち止まり「あれ！」とつぶやくと「ツクツクホーシ ツクツクポーシ」の蝉の声。T君のその表情は、「ジージーでもミーンミーンでもない蝉の声が聞こえてきたね。いつもと違うね。」と言わんばかりでした。また、ある時には、風が吹いて心地よい場所を見つけると「ここ 涼しいよ」と図鑑を見ていた子どもたちです。日中はどんなに暑くても、季節は巡ってきていることに気付かされています。

さて、コロナ感染拡大が止まらず富山県でもまん延防止等重点措置が適用され、緊張が求められています。そこで、幼稚園でも改めて子どもたちに消毒、手洗い、密を避ける、大きな声ではおしゃべりしない、給食時は黙食をしましょうと働きかけました。すると「知ってるよ、コロナになるからね」「お家の人が言ってたよ」の反応があり、給食時は感染防止の意味を理解し本当に静かに食べることができることに感心させられました。保育者の言葉に関心を向け、意味を理解しようとし、実行できるとは、子どもたちの心が育てられてきている証拠そして、保育者の思いを汲み取ろうとしているからと思うのです。

今月の主題は「心かよわせて」です。神様・自然・友だち・物・事などと「心かよわせて」過ごす9月があります様にと願っております。「心をかよわせる」ためには言葉や行為によるコミュニケーションが必要です。そして、言葉の裏側に隠れている思いを汲み取ろうとする作業が必要なのでしょう。子どもたちは、3歳過ぎ頃にはある程度言いたいことを言葉で表現することが出来るようになります。しかし、体験や語彙が少なく、心で感じたり思ったりしたことを言葉で上手に表現できるわけではありません。子どもの気持ちと言葉による表現の関係を「ジュースに浮かぶ氷にたとえた」文章がありました。それは、「ジュースに氷を浮かべると、氷の一部だけが上に出るが大部分はジュースの中に沈んでいる。見える部分が子どもの言葉であり、子どもの行為、行動である。ジュースの中に沈んで見えない部分は、言葉に表現できない子供の気持ちである」(榎沢良彦氏)というものでした。なるほどと思いました。つつい私たちは、目に見えて浮かんでいる氷を見て判断してしまいがちです。しかし、ジュースの中に沈んで見えない部分の気持ちを大人が推し測って言葉にしてあげることが大切なのですね。それが子どもの気持ちの代弁であった時は、納得し嬉しそうな表情をみせてくれます。コミュニケーションが取れるとその人と一緒にいることが楽しくなります。相手がうなずいてくれたり、「それからどうしたの」「へーそれはすごいね」「さすが」等と合図地を打ってくれると話す意欲が高まることでしょう。また、話したくなるような感動体験を積み重ねていくことにより、場面に応じた言葉が使えるようになることでしょう。喜び合う体験や、子ども自身が考えて判断できるような機会も大切にしていきたいものです。

安心して自分の思いを出せる関係の中で「心かよわせて」過ごす日々であります様にと願っております。